
鳥人間

とり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鳥人間

【Nコード】

N9190C

【作者名】

とり

【あらすじ】

彼女は生まれつき空を飛ぶことが出来た。けれど、幸せだった彼女の生活は、人間社会の動きに潰された。それから幾年も過ぎたある日、彼女は見知らぬ男と出会う。男は優しく彼女に話しかける。そしてその男を切欠に、再び彼女は人間社会に飛び込み、さらに見知らぬ集団と出会う。

始まりと、終わりの日

彼女は生まれつき空を飛ぶことが出来て、それは言わずもがな、自慢できる特技となった。

鳥のようにツバサを広げなくとも、高く、青い大空を自由に飛び回ることの出来る彼女は、それが当然のことではないことを知っていた。知っていたからこそ得意になり、見せびらかすようにして街中を飛び回った。

彼女は幸せだった。

皆が遠回りをしなければならぬ道のりも、彼女は一直線に進む。渋滞知らず。

ちよつと失敗したり、失礼な発言をしても、誰も彼女を無視しない。尊敬の的、羨望の的。

天使、妖精、魔法使い、女神様。全てのあだ名が彼女をさらなる大空へ飛び立たせた。

彼女は幸せだった。

けれど、そんな夢のような毎日は、キラキラと輝かしい光の結晶によって、無残にも引きちぎられ、彼女は難なく地上へと落下した。

「あれです！皆さんご覧下さい！空を飛ぶ少女です！」

パシャッ。カシャッ。カシャカシャパシャカシャッ。

光の結晶は、カメラのフラッシュ。

もげた鳥は、小さな少女。

今日、この日。8月8日のお昼過ぎを切欠に、彼女は全世界に名前を知らしめることに成功した。

翌日の朝刊の一面は全て、宙を舞いながら笑う彼女の姿で埋め尽く

された。

国中の誰もが彼女を一度でいいから目にしたいと考え、そして瞬く間に彼女の自宅は多くの人間に囲まれた。

両親は初めはのうちは驚き、戸惑っていたが、次第に笑顔になり、さらには饒舌になった。

そして——幸せな笑顔が広がったその街で、彼女は笑顔を失った。

1 アゲハとサナギ

東の空から、太陽が顔をもたげていた。ギラリと肌を焼く、そんな一日が始まった。

「起きなさい、アゲハ。今日は晴れていますから、洗濯物を干して下さい」

カーテンの隙間から、熱い日差しが窓を抜けて部屋を照らす。

アゲハはお腹の上に掛かっていたタオルケットを握り締めると、もぞりと身を起こした。

「アゲハは、今日はどこかへ出かけますか？」

そう広くない室内に響いた声に、アゲハはそれは嬉しそうに目尻を下げると、大きく頷いた。

「友達と遊んでくるよ」

そう言った直後に、アゲハは部屋を飛び立った。

アゲハは日が暮れるまで、沢山の友達と遊んでいた。友達はいずれアゲハのように飛ぶことができ、アゲハはとても楽しかった。

「そろそろ、帰るね」

アゲハは友達にそう告げると、手を振りながら家路につく。橙色の

空を見上げながら、アゲハは上機嫌に大きく宙返りをし、そして見事空中で着地した。

その時だった。パチパチと耳に響く音が森の中で木霊したのは、アゲハはギクリと身を縮ませて、ゆっくり周囲を見回した。けれど、動くものは風に揺れる自然だけで、あの音の原因は見当たらない。アゲハは気のせいだ、と己に言い聞かせるように首を振ると、そつと宙を進んでいく。

そして、それでも背後を気にしていたアゲハがようやく前方に顔を向けた、途端に何かにぶつかった。

「帰るのかい？」

目の前に、男が立っていた。アゲハは驚きのあまり一瞬喉を詰まらせた。

「あれ、もしかして……しゃべれない？」

アゲハのすぐ頭上から声が振ってくる。あまりの身長差に、飛んでいるアゲハのさらに上で、男が困ったように笑っている。

アゲハは男の顔を恐る恐る見つめた。優しそうな、けれどどこか頼りなさそうな目尻が印象的で、身体つきも、高い背丈に反してひょろりと細く、周囲を囲む木の枝のようだった。

そんなことを考えながら男を凝視していると、男がクスリと笑いた。がら一步距離を縮めてきた。その一步は、二人の間の空間を無くした。

アゲハの全身の毛が逆立ったようにアゲハが身を奮わせた。男はそれを見計らったように、そつとアゲハの身体を抱きしめる。途端、アゲハは凍ったように動けなくなる。

「君の家に遊びに行きたいな」

唐突な内容だった。その為、アゲハは瞬時にその内容を理解できず、首を傾げる。男はもう一度、その耳元で囁いた。君の家を見たいんだ、と優しく、諭すように。

「だ……め。母さんが、ダメって、言う、から」

アゲハは得体の知れない生き物と対面している気分だった。自然と声も震えてしまい、その震えは小さく体中に広がった。アゲハは、怖さと戦っていた。

けれど、男はアゲハを抱きしめたまま、再び困ったように笑う。そして、そっとアゲハの震える背中をあやすように叩いた。

「しゃべることが出来るんだね？」

「は、い」

「じゃあ名前」

男が人差し指を立てながらにつこりと目を細める。アゲハはその意図が掴めず、ポカンと宙に浮いていた。ただ、男の腕の中から解放されたことにほっとしていた。

そんなアゲハの様子に、男の困った笑顔はもはや動かぬものとなっていた。

「名前を教えて欲しいのだけれど、駄目かな？」

「あつ……」

やっと男の言わんとすることが分かったアゲハは、なんだか無性に恥ずかしくなり、僅かに俯く。けれど、その状態で、確かに口を開いた。

「アゲハ」

「揚羽蝶の、揚羽かな？」

「え…？」

「いや…いいんだ。うん。アゲハだね」

「そう、アゲハ」

そう答えたアゲハは、それから何か思いついたようにおずおずと顔を上げると、後ろで手を繋ぎながら呟くように尋ねる。
男はその様子を、微笑みながら見つめていた。

「…名前」

「僕の、名前？」

「そう」

「知りたいの？」

そう言われて、アゲハは強張った顔を見せた。後ろで繋いだ手に、ぎゅっと力が籠る。

「聞いちゃ、駄目だった？」

「まさか。僕の名前はサナギ。蛹のサナギさ」

「サナギの…サナギ？」

「うん。サナギでいいよ」

「サナギ」

「そうだよ」

見上げた先にある優しい笑顔に、アゲハは強張っていた頬がふにやつと緩むのを感じていた。
そして、心臓がドキドキしていた。こんな風に男の人と話すのは、どれくらい久しぶりだろうかと考える。それは、思い出せなかった。

「じゃあアゲハ、またね」

男は静かに背中を見せると、暗い森の奥に消えていった。

「……」

アゲハは、男が草を踏む音が聞こえなくなるまで、男が立っていた場所で佇んだ。

「ただいま!」

狭い室内に、その声は大きく響いた。アゲハは息を切らしながら部屋の布団めがけて飛び込む。

「おかえりなさいっ。遅かったですね!」

勢いづいた声が続いて響く。アゲハは興奮した様子で飛び上がった。

「今日はサナギって人に会ったの!私と話したわ!」

そして再び布団にダイブ。

「それはよかったですね!それじゃあおやすみなさい」

一日の終わりを告げる挨拶に、

「おやすみなさい!」

アゲハは大声で返すと、そのまま眠りにつく。
空腹も家事も、全てを忘れて、眠りに落ちた。

2 サナギの言葉

「いってきます」

アゲハは引き戸を閉めながら外に出た。生暖かい空気を肺一杯に吸い込んで、そしてほっと息を吐く。

見下ろした先には、履き慣れない赤い靴を身につけた足があった。草と湿った土を踏む感覚がとても懐かしい。

そして次に顔を上げると、いつも通りに男は立っていた。

「おはようアゲハ。今日は晴れたね」

「おはようサナギ」

アゲハは覚束ない足取りでサナギに駆け寄ると、そのままサナギの胸に抱きついた。サナギはそれに驚くでもなく、当然のように抱きとめる。

「お母さんはまだ寝てるの？」

「うん…寝てる」

毎朝繰り返される会話を今日も繰り返して、そして二人は落ち葉が見えだした山の道をゆっくり歩き出した。

「今日はどこへ行くの？何を教えてくれるの？」

「そうだな…それじゃあ、学校の様子でも教えようか？」

サナギは有名大学の院生で、今は夏休みなのと言う。この綾那山

にはサバイバル体験をしたくて、一人登ってきたとも言った。
もう幾年もこの綾那山から降りたことのないアゲハは、サナギが話す街の様子に、毎日耳を傾けていた。気がつけば一ヶ月ほど時間は過ぎていた。

「それが…学校。楽しそうだね」

「アゲハは学校にも行ったことがないのかい？」

「ううん、小学校には…二年間だけ。だからちよっと、忘れたのかも」

そう言つて黙り込んでしまったアゲハを、サナギはそつと抱きしめた。高い高い木の上で、二人はそつと寄り添っている。

サナギは、アゲハが十年前に新聞の紙面を独占した少女であることを、出会つた翌日にアゲハから聞いた。そして、それは辛かつたねと言つてアゲハを抱きしめた。

アゲハはそれがとても嬉しかった。十年前、周囲の人たちが口を揃えて言つたような、賞賛の言葉ではなかったから。

それは、アゲハの警戒を解く一つの切欠でもあつた。

「ねえアゲハ…君はもう十八歳だ。いつまでこうしているんだい？」

「え……」

サナギの言葉はいつだつて唐突だつた。そして今日も。

「僕と一緒にこの山を降りないか？」

本当に唐突で、アゲハは決まつてうろたえる。けれど、数十秒黙つて考えた後、アゲハはしっかりと首を横に振つた。

「降りたく、ないのかい？」

「私の家は、ここだもの」

「……でも、食べ物が少ないだろう、ここは」

サナギの言う通りだった。アゲハの身体は、見るからに痩せ細っていた。頻繁にアゲハの身体を抱きしめるサナギにはよく分かっていた。

「木の実以外には何を食べているんだ？アゲハが自分で耕している畑は……残念だけど上手くいっていないみたいだし」

「……そんなこと、ない」

「あんな野菜は、失敗作っていうんだよ」

「それでも、それを食べて、私は生きてる……生きてるわ！」

珍しく声を荒げたアゲハは、はっと我にかえると、気まずそうに身を縮める。そんなアゲハの肩を、サナギはそっと抱き寄せる。

「ごめん、ちょっと言い方がまずかったね。ねえ……アゲハ。アゲハはもっと色々な事を知りたいだろう？僕の話、食い入るように聞いているよね？」

「……」

「拾った新聞からの情報だけでは、つまらないのだろう？なにより読めない字が多いはずだ」

「……それは」

「だから、ね。山を降りよう？」

じつとアゲハの顔を覗き見るサナギに、アゲハがそれを遮る様に首を大きく横に振った。振りながら、言う。

「駄目……駄目！……母さんも、いる、から」

そしてアゲハはそのまま木の上から飛び立っていった。

残されたサナギは、悲しげな瞳でそれを見届けて、そしてはあっと小さく息を膝元に吐き出す。そして再び顔を上げた時には、

「やっかい、だな」

アゲハが見たこともないような目つきで、そして口元を歪ませていた。

一時間後、アゲハはサナギがあの高い木から降りられないのではと心配して戻ってきた。

けれど、それは杞憂に終わった。

3 アゲハの花、そして闇

二度と会いに来てくれないかもしれない。

二度と話すことも出来ないかもしれない。

二度と…抱きしめてくれないかも、しれない。

アゲハは布団の中で、小さく膝を抱えて横たわっていた。その顔色は青白く、唇が小刻みに震えていた。

月の光だけが差し込む荒屋で、アゲハは中央を陣取っている。

室内に物は少ない。布団の他には、捨てられていたものを拾い集めた新聞の山、木の実の入った籠、水を溜めている古い壺に、着替えが一枚。そして唯一小奇麗な赤い靴が引き戸の傍で目だっている。

アゲハは小汚い少女だった。

だからこそ、アゲハはサナギが自分を抱きしめてくれることが何よりも嬉しかった。時折現れる、綾那山を登ってきた人達が自分を見る目は、とても同じ人種を見るようなものではなかった。まるで大きな生ゴミが歩いているとも言いたげで、アゲハはいつだってサツと身を隠した。

また、サナギが自分を人間だと認めてくれていることが嬉しかった。飛んでいる場面を目撃されたアゲハに突き刺さる言葉の矢は、いつだって「化け物」だった。汚い身なりがさらにそう思わせるのかも知れない。

アゲハにとって、サナギは花だった。自分だけだった世界に咲いた、美しく凛々しい黒い花。

それは傍にあるだけで、アゲハを笑顔にさせた。

その花を、アゲハは拒んでしまった。アゲハは久しぶりに涙が零れ

た。

アゲハは山を降りたくなかった。怖かった。自分のような生き物を受け入れてくれるはずがないと考えていた。例え受け入れてくれたとしても、それはアゲハの望むものではないと確信できた。晒し者にさるのだ。

ならば飛ばなければいい。そうも考えたのだが、それでもアゲハは怖かった。バレない、という確証はないのだ。それに、拾った新聞に書かれていた。まだ世間はアゲハを探している。飛ばなくても、幼い頃の面影を辿って捕まる可能性も否めない。

アゲハはそれを想像し、恐怖で心臓が収縮したように胸を押さえ、そして咽た。

怖い、けれど傍にいて欲しい。いや、もう遅いのかもしれない。呆れて、帰ってしまったかもしれない。

アゲハの夜は、長かった。

4 静かな荒屋

アゲハが目を覚ましたのは、太陽が下り始めた頃だった。あまりの空腹に目が覚めて、そして力ない様子で布団の上から身を起こした。手櫛すら通らないばさばさの頭をひとなでして、そして睫毛にこびり付いた目脂をこしこしと擦り落とす。

座ったままの姿勢で宙に浮いたアゲハは、空き缶に水を汲み、プラスチックの皿に木の実を乗せると、再び布団の上に戻ってそれらを口にした。冬に向けての貴重な食物は、一日に食べる量を限らなければならぬ。アゲハは一粒一粒を大事に噛み砕いた。

食べ終わって、アゲハはぼんやりと窓の外を見る。いい天気だった。

「いるわけ……ないよね」

小さく呟いてから、数秒俯いて、それから弱冠焦ったように立ち上がると、引き戸を引いた。外を見た。

「……」

誰もいない玄関の先を、アゲハはじつと見つめていた。玄関の先の、森の先にも、全く人間の気配はなかった。花が、消えた。ポツリとアゲハは呟いた。

それから、アゲハは久しぶりに沢山の友達と遊んだ。一緒に宙を舞い、共に水を飲む。すぐに夕暮れはやってきた。

「じゃあ、またね」

そう言つてアゲハは友達に手を振った。そういえば、これが日常だったな、とアゲハはなんだか可笑しな気分になった。そして、胸が鈍く痛んだ。

暗い顔を俯けながら荒屋に着いたアゲハは、信じられない光景を目にしていた。男が、サナギが家の前に立っていたのだ。

「サ、ナギ」

驚きと、確かな嬉しさから喉が詰まる。目の奥がじんわりと熱を持ち始めていた。アゲハは咄嗟に手を伸ばした。癖だろうか、今すぐサナギに抱きしめて貰いたかった。

腕を広げて近づいてくるアゲハに、サナギはにっこりと微笑んだ。そして、カラリと引き戸を数センチ開く。その様子にアゲハはギリと腕を広げたまま固まった。

「アゲハ、家に入ってもいいかな？」

初めて会った時と同じことを、サナギは再び言った。そしてアゲハもその時と同じ答えで返す。

「だ、だめ！」

「どうして？」

「……母さんが、だめって」

「ふうん。お母さんが、ね」

アゲハは開いた口が閉められなかった。まるで目の前にいるサナギ

が、今まで一緒に過ごしてきたサナギとは別人に感じられたのだ。口調も、顔つきも、その身が醸す空気全てが別のもののようで、アゲハは戸惑ったように視線を彷徨わせ、けれど最後はサナギへと向けた。恐る恐る、サナギの顔を見つめる。サナギはその視線を、笑顔で受け止めた。否、跳ね返したようにアゲハは感じた。

「ねえアゲハ？ 今日アゲハは一日何していたの？」

「……今日は、友達と」

「友達つて、鳥のことだよ。沢山の、鳥の群れ」

「な、んっ」

「君は鳥に話しかけるんだ？」

「……見てた……んだ」

悪いことなどしていないのに、アゲハは無性に居心地の悪い気分だった。人間以外の生き物を友達と呼ぶ自分が、とても陳家で馬鹿だと言われているような気がした。会話のできない鳥に話しかけることが愚かであると、そう諭されているような、そんな気もした。

歯を食いしばって宙に浮くアゲハを見て、サナギは軽く溜め息を吐いた。そして吐いてすぐに、困ったように笑みを作る。その笑顔のまま、引き戸をさらに引こうとした。

アゲハの頭の中が、一瞬にして赤く染まる。

「だめ……入っちゃ、だめっ」

鳥に話しかけている事実を突きつけて、こんなにも惨めな気分させるサナギ。そんな男が、己の家の中に入ったらどうなるか。自分がどんな気持ちにさせられるのか容易に想像が出来たアゲハは、扉に突進する勢いでサナギを押しやり、少し開かれた引き戸をピシャリと閉める。

扉の前に立ち塞がるように、アゲハは宙に浮いていた。サナギが大袈裟に息を吐いても、アゲハはビクリと肩を揺らしはしても、そこをどこうとはしなかった。

サナギの表情が、途端になくなっていった。能面のようなその顔で、サナギはだるそうな声を出す。

「本当にさあ…アゲハは面倒くさいね。でもね、君は女で、僕は男なんだ」

そう言うや否や、サナギはアゲハを片手だけで押し飛ばした。その細い身体のどこにそんな力があるのかと思わせるほどに、勢いよくアゲハはどさつと地面に腰を打ち、そして呆然と顔を上げる。そこに見えたのは、やはり表情の読めない能面だった。

そしてその能面をくると扉へ向けると、勢い良く引き戸を引いた。その様を見て、アゲハは声にならない絶叫を胸の中で発していた。男は一部屋しかない、おまけに布団を二枚敷けるか敷けないか程の室内を見回して、そして視線は室内に向けたまま口を開いた。地面に手を着き、俯いたアゲハは、まるで地獄からの囁きを覚悟するかのように、ぎゅっと固く目を閉じていた。

「ねえアゲハ、おかしいね。いないよ？お母さん」

アゲハは涙が零れないように、強く、強く瞼を閉じ続けた。

5 通信中

夜も更けた森の中に、小さなテントが張られていた。そしてそのすぐ傍の木の上で話し声が聞こえてくる。静かで、けれどしっかりと響くテノールの声。

「もうすぐ連れて行けそうだ。ああ…現実を見つめてくれただろうさ。そして今頃泣いているかもしれないな」

太い木の枝に座っている男は、その細い身体を幹に凭れさせて、片手には長いアンテナの伸びた携帯式の通信機を持ち、耳に当てていた。そして軽快な口調で話していた。

通信機からも声が聞こえる。お前…何をしたんだサナギ、と怪訝そうな男の声があった。

「何って…教えてあげたのさ、君は一人ぼっちなんだよ、ってさ。あの子、家の中でずっと一人で会話してたんだぜ？まるであのボロ屋の中に母親がいるみたいにさ。……ん？なんでそんなこと知ってるかって……そりゃ文明の力さ」

サナギは通信機を持たない方の手の上にあつた、直径5センチほどの立方体をひよいと宙に投げて、再び手に掴んだ。その機械には通信機と同様アンテナが立っており、また、網の張られた丸い穴から、布が擦りあうような音が時折聞こえてくる。

通信機から、なるほど…盗聴器だな？と問いかけられて、サナギは、ピンコ、と笑いながら答えた。

「すごい時代だな。そして便利だ。あの子はよくしゃべるからどこにいるかもよく分かったよ。……ああ、仕込むのは簡単だったな。」

あの子を抱き寄せる時に、いくらでも。あの子は気付いてないだろうけど、あの子の衣服から靴、髪の毛に至るまで全部でいたい…。そうだな、二十以上の盗聴器を仕込ませてもらったよ。幾つか落ちたみたいだけど、それはそれで役に立つだろうし。まああれだけ小さな機械、気付くわけもないだろうけどな」

得意げに語るサナギに、会話相手の男が口籠った。サナギが不思議に思っただけの名前を呼んでみると、男は暗い声を聞かせてくる。お前がそれだけの数を仕込む事が出来るほどに抱きつかせるなんて…サナギ、お前そうとう信用されてるんじゃないか、と。それにはサナギの顔が僅かに強張った。けれどそれは、男に伝わるはずもなく。サナギは愉快だと言わんばかりの明るい声を機械に通す。

「だから、上手くいきそうじゃん？次に会った時、弱ったあの子に俺がすることはただ一つ。優しくしてやる、それだけだよ。俺に、心底安心して、身を任せて…そして離れられなくなればいい。そして、俺はあの子と一緒に帰るよ。そっちに、ね」

通信機は暫く沈黙を保った後、健闘を祈るよ、と一言残してブツツと音がした。通信が途絶えたのだろう。

サナギは機械を数秒じっと見つめ、そして周囲を見回し誰もいない事を確認した後、不意に脱力したように凭れていた木の幹に抱きついた。ずるずると木の上で器用に体勢を崩していくサナギは、眉を寄せて、目を閉じていた。

「仕方がないだろ。決めていたことだ」

自問自答するように呟くテノールは、深い闇の中でよく響く。

サナギの瞳が薄つすらと開く。数時間前の少女の顔を思い出していた。

誰もいない荒屋を、必死で隠していた。

「きっとあれが…彼女の、アゲハの世界だったんだろうな。母親が傍にいて、沢山の友達がいて自分は幸せなのだと、そう思い込みたかった……そうだろう？」

そして自分はその世界を壊したんだ、と、サナギは自嘲するように口元を吊り上げる。

そして、馬鹿だな、と呟いた。

「俺にそっくりだ。真実を捻じ曲げるその自分勝手なところが…けれど俺は、やめないよ」

お前を連れ帰り、俺は自由になる。勝手と罵られても構わない。痛む胸に気付かない振りをして、サナギは静かに木から飛び降りた。

5 通信中（後書き）

話が…なかなか進みません（汗
恋愛ものはずなのに…苦笑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9190c/>

鳥人間

2010年10月28日04時44分発行